

郡上八幡城の模擬天守とおよし

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

一 一 両編成の短い電車を郡上八幡駅で降りると、私と同行者は町中を外れて吉田川を目指した。川の水はサラサラと透き通り、草木はあくまでも青く、ところどころで鮎釣りの竿が揺れる。川辺を歩き、郡上八幡の中心街に近づくにつれ、木が茂った小山の上に白い天守が見えてきた。木造の模擬天守では日本で最も古い郡上八幡城の天守だ。

この城は標高三五四メートルの八幡山の山頂にあり、永禄二（一五五九）年に遠藤盛数が砦を築いたことにはじまる。天正十六（一五八八）年に城主となった稲葉貞通によって近世城郭としての基礎が築かれ、宝暦八（一七五八）年には青山氏の居城となり、そのまま明治を迎えた。この間、ここに天守が築かれたことはなかったという。

その後、城郭の建物は取り壊されたが、昭和に入ると城址の整備計画がもちあがり、ならば天守を造ろうということになった。前述したように、郡上八幡城にはもともと天守がなかったのに、こうして造られる天守は再建や復元ではなく模擬天守という。

ただし、まったくの創作は難しいのか、当時残存していた同じ岐阜県の大垣城の天守がモデルとなり、昭和八（一九三三）年に竣工した。木造四層で高さは一八メートルの小ぶりな天守だが、計画にあたっては、

「内部はともかく、外観は四方どちらから見ても美しい」ということを念頭に設計されたという。たしかに、吉田川から青空に映える白い天守を見た時には、かすかに姫路城を思い浮かべた。

ちなみに、モデルとなった大垣城の天守は、昭和十一年に国宝となったが、同二十年の空襲によって惜しくも焼失した。現在は鉄筋コンクリート製の天守が建てられている。

さて、八幡城の天守の前には、小さな祠がぼつんとある。これは人柱になった「およし」という女性を祀っていると伝えられている。石垣天修理の所に神路村（現・大和町神路）の百姓の娘およしが進んで石運びに加わり、遂には人柱となって城を守る決意をしたという。また、この祠だけではなく、八幡山ふもとの善光寺の境内には、「およし観音」が祀られている。

江崎俊平の『続・城 その伝説と秘話』によれば、郡上八幡では火災など変事がおこると、およしの祟りだと噂されていた。そのためか、七月中旬から九月上旬までの三三夜にわたる郡上おどりでは、毎年八月三日は鎮魂のために「およし祭り」として開催され、締め曲の歌詞が特別な「およし物語」になる。城に人柱の話はつきものだが、郡上八幡のおよ

しは地元の人々に相当親しまれている例だといえる。なお、人柱とは別に樹霊との異類婚姻譚でよく見られるパターンのお話も伝わる。修理のための木材を切り出していたが、その中の一本が神路まで来ると動かなくなった。人海戦術をとってもびくともしない。ところが、およしの手伝いと、すんなりと城下まで運ばれた。こちらの話は、人柱のインパクトに押されたためか、あまり知られていない。



郡上八幡城の天守

[交通] 長良川鉄道郡上八幡駅から天守まで、徒歩約1時間